和歌山大学
クリエ映像制作プロジェクト　2012 年度
作成者・代表　九鬼　智肖

1.　目標

- ◆　映像番組の制作・伝達についての知識を学ぶとともに、映像の役割について考える
- ◆　番組制作を通じて、プロジェクトの内外とのコミュニケーションを学ぶ
- ◆　大学内外を問わず様々な人と接することにより、個人の大学生としてのスキルを上げる
- ◆　これまでの枠にとらわれず活動し、存在を内外にアピールする

2.　目的

番組制作を通じた、コミュニケーション能力や調整能力などの習得を一つの目的としている。番組制作を通じて得られる結果は、作品だけではない。作品を完成させるには、様々な過程がある。企画立案をすることから始まり、スケジュールやスタッフの確保、外部の方との交渉、撮影、編集、手直しなど多岐にわたる。その全てを一人だけで成し遂げることは、ほぼ無理である。他人の協力がなければ、一つの番組を作ることはできない。私たちのプロジェクトは、こうした制作過程の中から、スタッフと調整を重ね制作を円滑に進めることや、プロジェクト外の方ともオフィシャルなコミュニケーションを取れるようにすることなどを目指している。これは、大学を卒業した後も、社会で必須の能力であると考え、重要視している。

また、我々の持っているスキルやネットワークをフルに活用することで、地域社会の役に立てないかと考えた。大学生のフットワークの軽さを生かし、大学や地元の情報を広く発信するために、プロジェクトの活動を行う。

3.　主な活動内容

先に挙げた通り、企画立案から完成までの一連の過程を全て学生自身が行う。テレビ局や番組制作会社などでは、分業体制を作って作品を完成させる。しかし我々が目指すのは、一連の流れを全てこなすことの出来る人材の育成である。撮影や編集など、どうしても自分の得意分野に偏りがちになってしまいそうになるが、全ての行程を一通りできるようになることで、制作に関する知識をより深めていくためである。

また、プロジェクト内から企画を出す他に、プロジェクト外から企画が持ち込まれることがある。活動を広く広報してほしい、一緒にイベントを盛り上げてほしいという依頼にも、あくまでプロジェクトの目的から逸れないように気を付けながら対応している。

4.　具体的な内容

NHK 杯全国大学放送コンテストへの参加

前期の大きな軸として活動した。4 年目の参加となる今年度は、映像番組部門 2 作品、映像 CM 部門 2 作品、朗読部門 2 作品の、計 6 作品の出品となった。9 月の作品提出に向けて、新年度に入ってすぐにミーティングを始め、早い段階から具体的な構成を練り始めた。

映像番組部門については、和歌山大学ソーラーカープロジェクトを取り上げたものと、地元の祭りを盛り上げようと取り組む大学生を取り上げたものの 2 つだった。前者については、三重県鈴鹿市で開催されるソーラーカーレースの取材を行うため 1 泊 2 日のロケを敢行。ソーラーカープロジェクトの皆さんの温かい協力を得ることも出来たおかげで、より良い作品を作ることが出来た。ここでも感謝を表したい。また後者については、2 年生が制作を指揮した。プロジェクト全体を仕切るのは、この時点ではまだ 3 年生だったが、2 年生が制作を担当することで、早い段階から意識の向上やスキルアップを図ることが出来た。

そして、映像 CM は今年も 1 年生が主体となって制作した。基礎を学ぶステップとする一方で、プロジェクトに所属した当初から活動のチャンスを与えることにより、主体性の向上を目指した。実際に、各々が協力しながら CM を完成させることが出来たうえに、そこに上級生が助言・協力をすることにより、上級生自身の成長にもつながった。

しかし、結果は、6 作品とも予選通過を果たすことが出来なかった。一昨年のドキュメンタリー部門全国優勝、昨年の入賞と好成績が続いてきただけに、この結果は悔しいものとなった。敗因等を改めて検証し、来年度の大会に生かしていく。

鈴鹿市でのドキュメント取材

ワダイのわだい！

『ワダイのわだい！』の録音風景を Ustream 中継した。『ワダイのわだい！』とは、wbs 和歌山放送（地元 AM ラジオ局）で放送される大学広報番組のことである。数年前から始まったこの番組だが、当プロジェクトでは昨年度から関わり始めた。昨年度は wbs 本社スタジオにカメラやミキサー、パソコンなどの機材を持ち込み、番組の録音風景を Ustream 生中継した。今年も、録音風景の Ustream 中継が主な担当だった。また、11 月の放送では、番組の企画段階から参加した。これは、過去 2 年にわたって当プロジェクトが独自に行っていた大学祭情報番組を今年度は行わなかったこともあり、より主体的に運営に関わるこ

とで、プロジェクトの存在意義を明確にするためである。大学の広報室や学生広報チーム、放送局と協議を重ねながら、ラジオ放送とは直接関係のないプロジェクト独自企画の放送や、スタジオ運営の補助なども行った。

プロジェクトメンバーのほぼ全員が一度に関わるイベントが今年度はこれだけだったこともあり、11 月の放送ではより力を入れたイベントになった。それは、プロジェクト全体の問題点が数々露呈することにもつながった。放送終了後に反省会を行い、その問題点を全体で共有するとともに、解決策を話し合うことで、次の展開につなげた。

（左：7 月の中継時の打ち合せ）（右：11 月の中継を前にした機材確認とリハーサル）

献血 CM 制作

京都府学生献血推進協議会から当プロジェクトに依頼があった企画。実際に学生が献血を呼びかけている様子を伝え、献血への協力と学推活動への参加を呼びかける CM を制作した。8 月 26 日に京都市内でロケ、9 月に編集を行った。ここで制作した 15 秒 CM は、eo 光ケーブルテレビを通して、関西一円にオンエアされた。

この CM 制作では、京都の学生と連携するということで、他の活動とは違った難しさがあった。地理的な距離の問題もあり、先方と顔を合わして話し合う機会がなかなか持ちづらかった。また、製作期間が比較的タイトであったことから、必ずしもメンバー全員が納得のいく作品が出来上がったとは言えない。今後はその反省も踏まえ、メールや SNS、インターネット通話などを用いた打ち合わせなど、新たな方法も模索していきたい。

ラテンアメリカ研究会活動報告ビデオおよび V-1 2012

和歌山大学の公認サークルであるラテンアメリカ研究会が、11 月にグアテマラの青年を和歌山に招待した。その模様を撮影し、活動報告と現地の方たちに渡す DVD にまとめた。11 月に紀美野町やふじと台小学校などでロケを行った際には、普段は入らないような場所での撮影もあり、参加したメンバーに若干の戸惑いがあった。しかし、これまでよりも綿密にメンバー間でコミュニケーションを取ることで乗りきった。

また、この DVD 制作と並行して、日本財団学生ボランティアセンター主催の『第 3 回 PR 力コンテスト V-1 2012』に出品した。このコンテストは、普段から学生が行っているボランティア活動を PR するための映像を制作しその出来を競うものである。研究会のこれ

までの活動の振り返りと、今回の招待企画について 30 秒にまとめて出品。予選を通過し、全国大会出場を果たした。

（左：ふじと台小学校でのロケ）（右：JIMOT CM 作品の一部。白良浜でロケした場面）

JIMOT CM COMPETITION

これは、よしもとクリエイティブエージェンシーが主催する CM コンテストである。沖縄国際映画祭で開催される本選への出場を目指して、当プロジェクトでは地元・和歌山をアピールする CM を制作し、出品した。

CM 制作の前に企画コンペが行われ、当プロジェクトではそこから参加した。メンバーが各々にそれぞれのアイデアを出し、それをコンペに出品。他の団体や一般の方々の CM 案を抑えて、当プロジェクトのメンバーの CM 企画が、和歌山県代表に採用された。

その後、細かな脚本などを改めて練った上で、1 月に白浜や和歌山城などロケを実施。わんだーらんど（吉本興業の和歌山県“住みます芸人”）や吉本の社員の方とともに撮影シーンなどを打ち合わせしながらロケを進めた。この模様は、地元のテレビ局や新聞社からも取材され、後日それぞれの媒体でのアピールも行われた。

本編 CM 及びメイキング映像を制作・出品し、現在は選考結果待ちである（2013 年 2 月末時点）。

大学紹介ビデオ

留学生向けに英語を交えた和歌山大学紹介の映像を制作する。和歌山大学国際教育研究センター(IER)の野田日向特任助教とともに進めている企画で、完成したものは和歌山大学のウェブサイト内で IER が運営する、留学生向けサイトにアップロードされる予定である。2012 年 12 月に撮影を一旦は開始したが、天候や季節の問題を考慮して 2013 年 5 月まで撮影を中断する予定である。それまでの期間に、もう一度改めて構成の練り直しや、撮影方法の検討などを行う。

ショートショートコンテスト

プロジェクト内で自主企画として実施する映像コンテスト。メンバーの制作能力の向上を第一の目的として実施した。これをプロジェクト内で実施した理由の一つには、この時期に当プロジェクトに見合った外部コンテストがなかったことが挙げられる。また、プロ

ジェクト内で一からコンテストを企画する事により、現在のプロジェクトの目指す位置や問題点の克服につながり、また、テーマなどに囚われない柔軟な作品制作が可能になると考えたことも理由として挙げられる。

テーマと作品時間のみを決め柔軟な制作を促す一方で、制作の基礎能力を見直しも図る。企画書や絵コンテ、制作スケジュールの提出を義務付け、マネジメント能力の向上・再構築も目指した。

5. 結果・成果

今年度は、新たな取り組みが目立った 1 年だった。従来から続けている NHK コンテストへの出場などは続けつつ、大学広報や外部企業との協力など、これまでとは少し違ったステージで活動をすることが増えた。それにより、先に挙げたオフィシャルなコミュニケーションを磨く機会は多くあったと思う。しかし、入賞等の記録はなかったのが現実である。それはコンテストの出場をあまり重視してこなかったということ、そしてプロジェクト全体のスキル不足というのが理由に挙げられる。この点については、来年度以降どうするか話し合わなければならない。

6. 今後の課題・展望

プロジェクト設立から 5 年目を迎えた。今年入ったメンバーは設立者を直接知らない世代になってしまった。5 年という期間が経った中で、どうしてもプロジェクト内の熱が下がってきてしまったことは否めない。

そこで、来期以降は原点に立ち戻って活動することが必要であると考える。これまでに培ったネットワークを生かしつつ、撮影から編集に至るまでの一連の制作技術の底上げや、設立当初の理念である『わかやまの情報発信基地』としての役割を改めて考えていきたい。しかしそのためには、プロジェクト全体の意識改革にまず取り掛からなくてはいけない。プロジェクトの目的や理想像を統一し、そこに向かって全力で取り組める体制を作っていく。

7. 感想

4 代目の代表としてこれまで活動を行ってきましたが、本当に何も分からないまま、先輩方やメンバーなどたくさんの方々に助けられながらここまで来ることが出来ました。様々な場面を経験することで、私自身が確実に成長できたと自負しています。これまでに得た経験をこのまま終わらせるのではなく、更なるステップにつなげるべく努力していきます。

最後に、この素晴らしい機会を与えてくださった学生自主創造科学センター、宇宙教育研究所をはじめとして、当プロジェクトにご支援・ご協力頂きました方々に感謝いたします。